

多田謡子

反権力人権基金

News

No.5

2011/07/01

発行・多田謡子反権力人権基金運営委員会

<http://tadayoko.net>

2010年12月11日

第22回受賞発表会を開催しました



夭折した故多田謡子弁護士の遺産をもとに出発した多田謡子反権力人権基金は、2010年12月11日、東京・お茶の水の総評会館で第22回多田謡子反権力人権賞受賞発表会を開催し、今年度もたくさんの皆さんが参加してくださいました。

発表会では選考経過を報告した後、受賞者である、報道と人権・連絡会、山谷労働者福祉会館活動委員会、柏崎刈羽原発反対地元三団体から講演を受け、基金より多田謡子の著作「わたしの敵が見えてきた」と賞金20万円が各受賞者に贈られました。(詳細は2,3面)。その後、同じ会場で恒例のパーティが行われました。

発表会から3ヶ月後の3月11日に起きた東日本大震災の結果、今、日本は想定を上回る最悪の天災(地震と津波)と、想定しえた最悪の人災(福島原

発事故)によって大変な困難に直面しています。

当基金は、民主党政権誕生後も続く国の原発推進政策に反対し、一昨年の上関原発に反対する祝島の人々に続き、昨年は柏崎刈羽原発に反対する皆さんに反権力人権賞を受賞していただきましたが、私たちの危惧が現実のものとなり、取り返しのつかない事故が起きてしまったことに強い憤りを覚えます。また、山谷や釜ヶ崎の労働者が、命を削られる被爆労働者として、文字通り使い捨てられている現実にも最大限の抗議を表明するものです。

闘い続けるすべての人々に心を寄せて、多田基金は本年も12月17日、第23回受賞発表会を開催します。受賞候補者の推薦とともに、受賞発表会・パーティーへのご参加を広く呼びかけます。(詳細は4面)

多田基金は継続のためのカンパを呼びかけています。

第22回受賞発表会

2010年12月11日 総評会館（東京・お茶の水）

人権と報道・連絡会

（マスコミ報道による人権侵害との闘い）



事務局長の山際永三さんは1985年に発足して25年間、人権と報道・連絡会が毎年行ってきたシンポジウムのリストをしめしながらお話しをはじめました。すでに1960年代、「暴力奨励の俗悪番組」を批判するような運動があったが、それはマスコミ報道の人権侵害批判には届かなかった。そんな中で、とりわけ80年代以降、警察が動く前にマスコミが事件を取り上げ、世論を煽って冤罪を作り上げる、情報化時代の冤罪事件が繰り返し生まれるようになったことを、人権と報道・連絡会は一貫して批判してきたと述べました。

そして、1985年に起きた、いわゆる「ロス疑惑」事件の経過を詳しく紹介しました。この事件では、週刊文春がテレビ朝日と組み、週刊誌の発行直前にテレビが「疑惑の殺人」を「スクープ」、それを受けて文春が大々的に報道、成功した青年実業家への世間の嫉妬も動員しながら、警察が動く前に「事件」が作り上げられたこと、結局、何の根拠もないのに、「日本全国が、三浦は怪しい、となっちゃった。左翼的な知識人ですら、あいつは怪しい。よくよく聞くとその根拠は、皆、文春の記事なのに、山際さん、あいつは怪しいよ、となった」というような事態が生じた経過を明らかにしました。80年代、週刊文春や週刊新潮など出版社系の週刊誌は、「新聞が書かない事件を書く」という方向で右肩上がりに売り上げを伸ばしていました。当時、逮捕された時点で人は呼び捨てにされ、手錠・腰縄姿で連行される姿が報道されて社会的な処罰の対象とされたのです。足利事件の菅谷さんの場合も、逮捕された時点で、建物の外階段を歩かされて引き回されています。

こうした事態に対して、人権と報道・連絡会は一貫して「原則匿名主義」を掲げ、一般事件は実名で報道するべきでないと主張してきました。さらに、ヨーロッパの例にならい、マスコミの記事を審査するプレスオンブズマン、報道評議会といったものを、

裁判官や弁護士も入れて作るべきで、報道による被害者を守る組織が必要だと主張してきましたが、大マスコミにはすごく抵抗感がある。それでは巨悪は暴けない、匿名主義では犯罪が増えてしまうという主張すらあります。

現代の社会について、山際さんは「権力対民衆」という単純なとらえ方では不十分で、権力と民衆の間にマスコミが強固に入り込んでおり、マスコミが大きな力を持って社会を操作していることを見落としてはならないと強調し、報道によって人権をおかされる人々を守るという出発点を忘れず、草の根の人権をめざして頑張っていきたいという決意でお話しを締めくくりました。

60年代に起きた「千葉大学腸チフス菌事件」には始まり「ロス疑惑」事件から「和歌山カレー事件」まで、私たちが本当にマスコミの操作から自由なのかどうか、一人一人が問われるお話でした。

山谷労働者福祉会館 活動委員会

（日雇い労働者の人権・生存権のための闘い）



活動委員会を代表して発言した藤田五郎さんは、はじめに山谷の日雇い労働者を支配していた暴力団との闘いの中で80年代半ばに殺された山岡強一さん、佐藤光男さんの名前をあげ、佐藤さんが監督として制作した映画「やられたらやりかえせ」の全国キャラバン上映運動を通じて、山谷の中に自立と解放の拠点を作ろうという機運が高まり、さまざまな人々の協力で、1990年、「寄せ場に開かれた空間」を作り出すために山谷労働者福祉会館が誕生したことを紹介しました。そして、初代館長戸村正博さんが述べた、「山谷労働者福祉会館が生まれたことは奇蹟である、そこは内と外が会う場所であり、人が独りよがりにならないために、自分ではないものと出会う場所である」という言葉を紹介しました。

そして、2008年の年越し派遣村に見られるように、不安定な雇用の中で仕事も住むところもなくしてしまう状況は全国に広がった、日本全国が寄せ場になったと述べ、野宿者を集めて働かせて一銭も

払わない、野宿しているのだから、食事と寝床を与えればただ働きも仕方ないと言い、抗議する者を殺害する事件すら起きていることを紹介し、日雇い労働者の権利を獲得する闘いは、野宿者の生存権を勝ち取る闘いにシフトしてきている、20年たって、状況はより切実になっていると述べました。

その後、山谷の闘いを紹介するビデオが上映されました。野宿者の貴重な収入源である空き缶回収を禁ずる「空き缶条例」に反対する最近の闘い、毎年恒例となった「山谷夏祭り」で、皆が共同で炊事し皆で一緒に食べる共同炊事の様子やカラオケ大会の様子などが紹介されました。夏祭りは、お盆で仕事がない、しかし、さまざまな事情で故郷に帰れない日雇いの仲間がたくさん居たことからはじまりました。さらに、2007年、墨田区役所に毛布や段ボールを持って押しかけ、野宿者に対して生活保護を認めさせるまで、区役所前にとどまり続けた闘いが紹介されました。この闘い以降、行政は野宿者にも生活保護を支給せざるをえなくなり、300人以上が認められました。

藤田さんは、ヤクザや警察権力だけでなく、空き缶条例や、炊き出しに対して地域の住民から「排除しろ」「迷惑だ」という声が起き、行政が排除に乗り出すというように、住民や自治労に属する自治体の労働者が排除、差別する事態が起きている、これは、格差社会が拡大し、弱肉強食をよしとする風潮が拡大していることに原因がある、少年による野宿者への襲撃事件の原因もそこにあるとして、今回の受賞を契機に、20年前の原点に立ち返り、一人一人孤立して生きている寄せ場の労働者、野宿者が仲間とともに生き、仲間とともに闘っていく、共同性を獲得していくために労働者福祉会館を拠点に頑張っていくという決意で発言を締めくくりました。

柏崎刈羽原発反対 地元三団体 (柏崎刈羽原発反対運動)



1969年に計画が発表されてから40年以上、原発に反対して闘い続けてきた柏崎刈羽原発反対地元三団体を代表して、武本和幸さんは、新潟県中越沖地震に襲われ、世界で初めて地震で破損した柏崎刈羽原発の現状をプロジェクターを使って詳しく説明しました。

2007年7月16日に起きた地震では300軒

以上の家屋が全壊、5万戸以上が停電、6万戸以上が断水するなど大きな被害を受けましたが、7基ある原発は想定をはるかに上回る揺れを受け、稼働していた4基すべてが緊急停止しました。しかし、変圧器から出火した火事を東京電力は自力で消すことができず、発生から2時間たって地元消防の手でようやく鎮火しました。耐震安全性が確認できるまで運転停止となった原発は、建物に多数のひび割れが走り、地震の影響が疑われる燃料棒自体のひび割れや放射能漏れも見つかる中で、東京電力と原子力保安院が「問題ない」と強弁、2009年12月に営業運転が再開されました。

武本さんは、1969年、計画が発表されてから建設される過程は田中角栄の全盛期であり、田中角栄の政治力と東京電力の金力に抗して闘い続けてきた、1974年に地震の問題を提起し、石油が産出する、地層の波打つ地域に原発をつくることの危険性を訴え、最高裁まで30年にわたる裁判を闘ってきたが、東京電力はずっと、地震の起きない強固な地盤の地域だと主張してきたと述べました。

そして、90年代に入って状況は変わってきたとして、1996年、巻原発の是非を問う住民投票で反対派が勝利し、原発計画を撤回させた闘い、2001年、5世帯に1人が原発関係者という刈羽村の住民投票でもプルサーマル運転反対派が勝利した闘いなどを紹介しました。2000年代に入り、電力の需要は頭打ちとなり低下しています。大規模な施設で集中的に発電し、長距離を送電する原発は、「大きいことはいいことだ」という60年代型施設であり、すでに有効性を失っている、原発を作らなければ停電すると言う宣伝もできなくなり、東海村臨界事故、2002年の事故隠し発覚による東京電力全原発の停止、依然として解決策のない高レベル廃棄物処理問題、高速増殖炉「もんじゅ」の事故による再処理計画の破綻など、何も解決していないにもかかわらず、「これからは原発を輸出する時代だ」と強弁して原発推進の姿勢を変えない政府と東京電力、原子力産業を批判、これからも、目の前にある原発と対峙して闘い続けたいと述べました。

武本さんは最後に、中越地震で被災した住民にはその日のうちに食料の配給など救援活動がはじまったが、それは被災者が10万人だったからであり、何百万人も被災者が出る原発事故がもし起きれば救援することは不可能だと述べて締めくくりました。まるで、3ヶ月後に発生する福島原発事故を予言したかのような講演でした。

第23回多田謡子反権力人権賞候補者推薦のお願い

2011年6月

多田謡子反権力人権基金運営委員会

本年度も、下記の要領で多田謡子反権力人権賞の候補者の推薦を受け付けます。多数のご推薦をお待ちしています。(これまでの受賞者は当基金のホームページで閲覧できます。)

記

- ・賞の内容 多田謡子の著作「私の敵が見えてきた」および金20万円の贈呈
- ・選考基準 国家権力をはじめとしたあらゆる権力に対して闘い、自由と人権を擁護するために活動している個人または団体
- ・推薦方法 候補者名と活動分野の簡単な紹介を付して、文書で下記住所に郵送、FAXまたはe-mailで送信してください。
- ・推薦締切 2011年9月30日
- ・推薦受付先 〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目8番1号
出雲ビル4階 東京銀座総合法律事務所内
多田謡子反権力人権基金運営委員会
TEL 03-3573-7737 FAX 03-3573-7189
e-mail web@tadayoko.net
お問い合わせにはできるだけe-mailをご利用ください。

なお、受賞者には受賞発表会での講演をお願いいたします。

本年も12月17日に受賞発表会を開催します。

2011年度の受賞発表会は下記日程で行います。今年もたくさんの皆様のご参加をお待ちしています。(受賞者決定後、詳細をお知らせいたします。)

- 12月17日(土) 午後2時から5時まで。その後同じ場所でパーティーを行います。
- 総評会館201号室 (東京・中央線お茶の水駅より徒歩5分)

基金継続のための寄付のお願い

基金では、闘い続ける人々を励まし続けよう、共に闘い続ける意志を表明しようという趣旨に賛同される皆さんからのご寄付をお願いしています。ご送金は下記口座まで。ご寄付と明記の上、お名前とご住所を付して送金して下さい。

【郵便振替口座】 口座番号 00110-2-356484 口座名称 多田謡子反権力人権基金